

# 解説・公家列影図

## 一血筋・才能・個性と鎌倉時代のキャラクターデザイン

石井 悠加

### 【概要】

「公家列影図」(京都国立博物館蔵、鎌倉時代中期)は、12世紀後半から13世紀前半の大臣経験者の男性たちを、初任時の年齢で、初任時順に描いた肖像絵巻です。絵師は奥書によれば後鳥羽院・後堀河院の時代に活躍した「似絵」の名手・藤原信実とされますが、実際には彼に連なる「絵師の家」に蓄積された下絵や模本を参考に、後嵯峨院の時代に制作されたと考えられています。

端正な顔、ユニークな顔、生真面目な顔や気弱な顔、怒った顔、笑った顔。描かれた57人一人ひとりの表情や姿は、まるで直接スケッチしたように巧みで個性的です。どう描き分けているのか？なぜ制作されたのか？これまでさまざまな観点から考察がされてきました。

今回、彼らの系図や逸話、詩歌管絃の事跡などについて調べたところ、彼らの「顔」の表現に込められた意図を考えるヒントが浮かび上がってきました。「天皇撰関御影」(徳川美術館蔵、鎌倉時代末)や「天子撰関御影」(皇居三の丸尚蔵館蔵、南北朝時代)などが生まれる「似絵」の時代への先駆けとなった「公家列影図」の、豊かな「顔」の表現の特徴について解説していきます。

## 1. 似絵とは

まず、鎌倉時代の「似絵」とはどのような絵画であるかという点について、次の2023年秋に東京国立博物館で開催された『特別展やまと絵—受け継がれる王朝の美』図録の「似絵」解説文をご覧ください。

鎌倉時代美術の特徴は「写実性」にあるといわれています。なかでも絵画で写実性が顕著とされるのが、肖像画と風景画です。

肖像画については、鎌倉時代には「似絵」と呼ばれる描法が流行します。似絵は、基本的には人物を前にしてその場で直接、対象の特徴を画面に表わす対看写照にもとづくものです。「後鳥羽天皇像」、「花園天皇像」「明恵上人像（樹上坐禅像）」などは、こうした似絵の代表的作例として名高いものです。スケッチにもとづくため、面貌部は細線を引き重ね、彩色は淡彩、紙絵であることも共通します。

一方でこうした似絵の描法は、過去の人物肖像を集成した「天子摂関御影」や、見たこともない歌人を描いた「佐竹本三十六歌仙絵」をはじめとする多くの歌仙絵でも用いられました。似絵の描法が面前する人物のみを対象とするのではなく、人物を描く際の基本的な型として受け入れられていった状況がうかがえます。

（略）

肖像画も風景画も、鎌倉時代には確かに写実的な表現に関心が払われています。ただそこに、人物や風景を美しく理想化して描く心が同時に存在していたことは、多くの作例が物語るところでしょう。

（東京国立博物館ほか編『特別展やまと絵—受け継がれる王朝の美』（NHKほか、令和5年）図録136頁解説、土屋貴裕氏執筆担当より）

ここでは、鎌倉時代の「似絵」とは、基本的には「対看写照」に基づく描法であり、人物を描く際の基本的な型となったもので、写実性と理想化が併せ持たれた作品を生み出していったものと説明されています。「公家列影図」について考える時にも、それが像主たち本人の特徴を反映していること、理想化の傾向があることに注意したいと思います。

## 2. 伝来・形態・概要

「公家列影図」は、現在は京都国立博物館の所蔵となっています。以前の所有者は実業家の前山久吉<sup>ひさきち</sup>（1872-1937）で（注<sup>1</sup>）、氏の没後は、少なくとも昭和28年（1953）の段階では文化財保護委員会の管理下に置かれていたことが分かっています（注<sup>2</sup>）。その後は京都国立博物館へ移管されて現在に至るようですが、前山氏がこの作品を購入したのはいつか、そして中世・近世にはどこに伝来していたものかということは明らかになっていません。

まずは、『特別展やまと絵』の作品解題で「公家列影図」の概要を確認してみましょう。

### 公家列影図

・一巻 紙本淡彩 縦38.2 横521.6cm

・鎌倉時代 十三世紀 京都国立博物館

五十七人の大臣を上下二段にわたって描いたもの。藤原忠通から花山院定雅まで、大臣の初任順に描かれる。花山院定雅が内大臣に就任したのが建長四年（1252）であることから、十三世紀中頃の制作とされる。奥書には「年中行事着座 土佐信実朝臣筆」の奥書があり、似絵の家系の祖とされる藤原隆信の息子、信実が描いたことが示される。実際に信実が描いたとは考えられていないが、隆信・信実につらなる絵師の制作とみられている。

各人物の描線は「隨身庭騎絵巻」とは異なり、肥瘦はなく、起筆の打ち込みや払いの痕跡も明瞭ではない。顔貌の輪郭には細線が引き重ねられ、似絵の描法が見られる。それによって個々の像主の描き分けがなされており、血縁関係による肖似性も意識されている。さらに、髭やほうれい線の有無、目尻の皺や白髪表現には、大臣初任時の年齢が反映されていることが指摘されている。

東京国立博物館ほか編『特別展やまと絵―受け継がれる王朝の美』（NHKほか、令和5年）作品解題（古川攝一氏執筆担当）より。（出品番号省略）

ここで述べられている特徴については、後ほど取り上げていきます。さて、現存する「公家列影図」所載の57人の大臣（1～57）、そして現在は失われている、

1 奈良皇室博物館編『日本肖像画図録』（便利堂、昭和13年）

2 奥平英雄『絵巻』（美術出版社、昭和28年）

第4紙と5紙の間にあった1紙に描かれていたはずの7人の大臣（×）を挙げた一覧がこちらです（注<sup>3</sup>）。

〈「公家列影図」所載人物一覧〉

1 藤原忠通	23 徳大寺実定	38 久我通光
2 源有仁	24 藤原師家	39 西園寺公経
3 藤原頼長	25 九条良通	40 大炊御門師経
4 三条実行	× 三条実房	41 九条良平
5 源雅定	× 花山院兼雅	42 九条教実
6 徳大寺実能	× 藤原兼房	43 近衛兼経
7 中御門宗輔	× 中山忠親	44 西園寺実氏
8 藤原伊通	× 九条良経	45 二条良実
9 藤原基実	× 大炊御門頼実	46 土御門定通
10 三条公教	× 近衛家実	47 九条基家
11 徳大寺公能	26 源通親	48 三条実親
12 藤原基房	27 藤原隆忠	49 大炊御門家嗣
13 中御門宗能	28 西園寺実宗	50 一条実経
14 大炊御門経宗	29 花山院忠経	51 衣笠家良
15 九条兼実	30 近衛道経	52 鷹司兼平
16 平清盛	31 九条良輔	53 九条忠家
17 花山院忠雅	32 徳大寺公継	54 徳大寺実基
18 源雅通	33 坊門信清	55 堀川具実
19 藤原師長	34 九条道家	56 二条道良
20 平重盛	35 三条公房	57 花山院定雅
21 近衛基通	36 源実朝	
22 平宗盛	37 近衛家通	

3 平林盛得「天子撰御影と公家列影図—所収人名を中心として—」（宮次男編『天子撰御影・公家列影図・中殿御会図・隨身庭騎絵巻』〈新修日本絵巻物全集 26〉角川書店、昭和53年所収）、三田武繁「『公家列影図』に関する二、三の問題」（『北海道大学文学部紀要』44巻3号、平成8年3月）所収「大臣初任表」、『鎌倉・南北朝時代Ⅱ 中世絵巻と肖像画』〈日本美術全集 8〉（小学館、平成27年）所収黒田智「公家列影図解説」、e国宝（[http://emuseum.nichi/go.jp](http://emuseum.nichi.go.jp)）内「公家列影図」（id:100955）解説参照。

---

紙面ではこれらの人物が1の藤原忠通から57の花山院定雅まで、上下二段に坐した状態で並んで描かれています。各人物の肩先には、既に全て落剥していますが、おそらく像主の大臣名を示していたらしい小さな短冊が貼られていた痕跡が残っています。

それぞれの像主については、平林盛得氏による「天子撰関御影」(皇居三の丸尚蔵館蔵、南北朝時代)との照合作業(注<sup>4</sup>)によって、そのほとんどが明らかになっています。さらに着座順が大臣の初任順であることも像主比定の手がかりとなっています。「公家列影図」に本来描かれていたはずの全64人の大臣たちの生没年・初任年を一覧にしてみましょう。

---

4 平林盛得氏(注3)前掲論文





【図1】「公家列影図」所載人物の生没年・初任年一覧は、右から左に流れる年表に64人の大臣の生没年のグラフを引き、大臣初任年に黒星(★)をつけ、その年の数えの年齢を添えたものです。黒星がきれいに流れ下りていることから、「公家列影図」が大臣、つまり内大臣・右大臣・左大臣・太政大臣の地位に上った者を順に描いているということが確認できます。また、最後の57人目の花山院定雅の初任年は建長4年(1252)であり、ここからほどなく成立したものであろうと推測されています。

## 「公家列影図」の特徴

それでは「公家列影図」の特徴について検討していきましょう。前掲の土屋氏の『やまと絵展』図録作品解題では、この作品について「個々の像主の描き分け」「血縁関係による肖似性」「大臣初任時の年齢の反映」の三つが指摘されているとありました。これは本日ディスカッサントとしてお越しくださっている黒田智先生が、小学館の日本美術全集の解説の中で挙げられた指摘です(注<sup>5</sup>)。

黒田氏の三つの指摘とは、次のようなものです。

一つ目は「個性の表出」で、「胴部は画一的で、簡素な白描にとどまり、有職や故実を無視した文様をもつ。これに対して、面貌表現は、細線を引き重ねた輪郭に、薄く黄土を刷き、唇に淡い紅を点し、老若や肥瘦など、じつに豊かな個性の表出に成功している」として、同じ像主と見られる木像(注<sup>6</sup>)がそれぞれ残る、源実朝と平清盛が例に挙げられています。

二つ目は「家族的肖似性」で、徳大寺公能・実定親子、藤原忠通・頼長兄弟、平重盛・宗盛兄弟、九条教実・忠家親子の四組の親子兄弟の面貌の肖似が例に挙げられています。

三つ目は「年齢表現の秩序」で、『日本美術全集』には各大臣を初任年齢順に再配列した独自の顔一覧が掲載されていますが、そうした配列にすることで「ひげ」「ほうれい線」「白髪と目尻の皺」の有無の傾向によって年齢表現の秩序が見られる点を挙げておられます(注<sup>7</sup>)。

5 加須屋誠責任編集『鎌倉・南北朝時代Ⅱ 中世絵巻と肖像画』(日本美術全集8)(小学館、平成27年)250頁「公家列影図」解説。

6 「公家列影図」の源実朝の面貌表現が、山梨・甲斐善光寺や京都・大通寺に伝えられた木像と相似であること、清盛の面貌表現は京都・六波羅蜜寺の經典を持つ僧形の木像とは異なる印象があることが指摘されている。

7 黒田智「絵画史料の解読方法—肖像画的胡須与年齢—」(『日本学研究』第33輯、社会科学文献出版社、令和4年12月)では、髭の有無、頭髮の色、目元・口元の皺を整理した表を提示されている。

さて、黒田氏のこうした三つの指摘を受けて、本発表では、次の問いを持ちたいと思います。それは、「鎌倉時代の似絵の絵師は、どのように過去の、あるいは面前の人物のキャラクターデザインをしていたのか？」という問いです。

この問いに対して、三つの検証を行います。一つ目は、「血筋と肖似性」です。「公家列影図」所載人物の「父系家系図」や「外祖父－外孫対応表」を照合しながら、父系の「一族の肖似性」が体格や顔貌などにおいて見られることを検証していきます。二つ目は、「紙形・肖像の型（パターン）の存在」です。「一族の肖似性」がみられない過去の人物の顔貌について、「中殿御会図」「時代不同歌合絵」などの当該人物との一致または類似がみられることを確認します。三つ目は、「才能・個性と造型」です。エピソードから想起されるキャラクター・イメージに相応しい表情・顔貌をしている人物について検証していきます。

それでは一つ目の検証に進みましょう。

## **検証1 血筋と肖似性**

### **(1) 父系の一族の肖似性の検証**

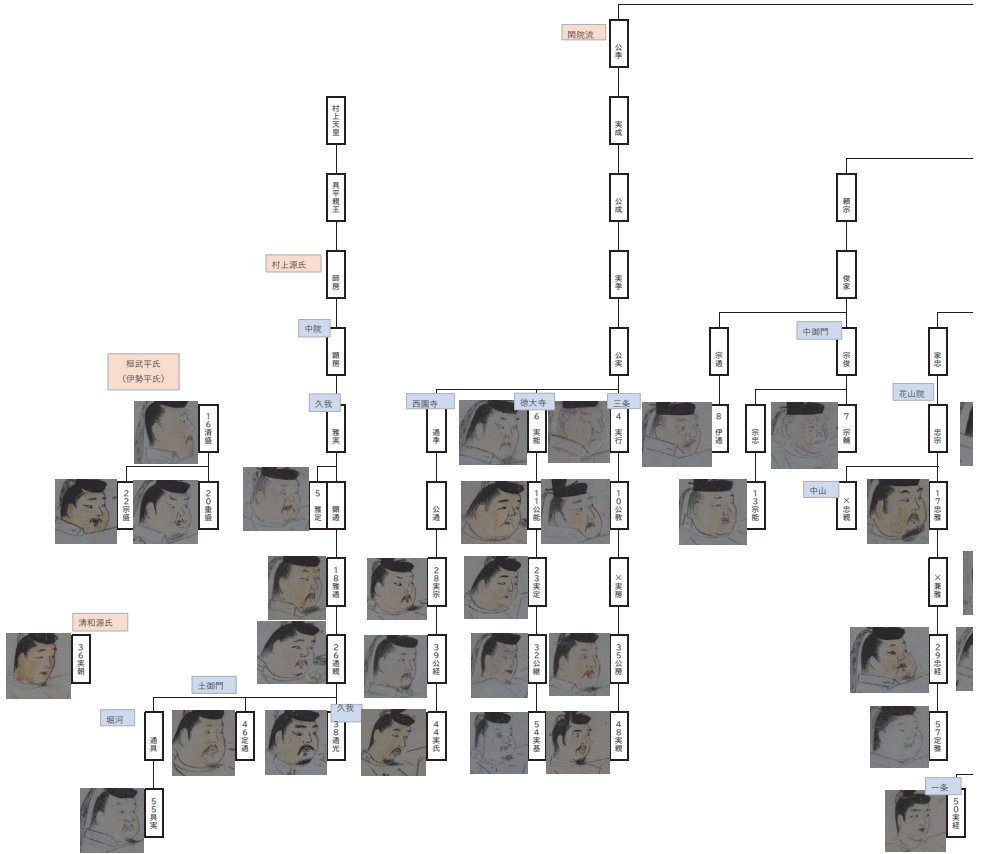
像主同士に血のつながりがある肖像画について、肖像画同士の容貌・姿が似ているかどうか、つまり「家族的類似性」という曖昧なものについて検証する必要がある研究者にはある、ということについて述べられたのは、黒田日出男氏（注<sup>8</sup>）でした。黒田氏は「天皇撰閔御影」（徳川美術館蔵、鎌倉時代末）の像主不明の9人の僧侶を比定する作業の中で、「肖像同士の容貌・姿が似ているか否か」という点、つまり非常に「曖昧さ」を含むものではある「家族的類似性」の検証の必要性を指摘されました。親子は顔が似るという事実は、もちろん『源氏物語』の物語展開にも生かされているように、古くからの共通の認識であったといつてよいものです。

そこでまず、「公家列影図」に描かれた人物たちの父系の略系図を起こし、家族的類似性、血筋による肖似性が意識されているかどうかを確認してみましょう。【図2】の「公家列影図」像主略系図（父系）をご覧ください。

8 黒田日出男『王の身体 王の肖像』（平凡社、平成5年、初出昭和63年）246頁

【図2】「公家列影図」像主略系図（父系）

数字1～57…「公家列影図」での着座順 ×…逸失した一紙に描かれていた人物  
 ※以下、「公家列影図」(京都国立博物館蔵)の写真画像は高岸輝氏の撮影による。





このように見ると、「公家列影図」が近衛・九条・二条・一条・鷹司の五摂家の血筋を中心に、最大で6代に渡る父系の子々孫々を含む肖像絵巻なのだということがよく分かります。また、前掲の【図1】「公家列影図」所載人物の生没年・初任年一覧」で描かれた総勢64人の生没年を見てみますと、「公家列影図」成立の上限である建長4年(1252)には、まだこれらのうち16人の大臣が存命中であったことが分かります。

ちなみに、干支で一回り廻った仁治元年(1240)の時点では、計24人の存命が確認できます。干支は単なる目安ですが、つまり「公家列影図」に描かれた人物のうち少なくとも3分の1以上の人物の顔貌表現については、本人の実際の顔立ちとかけ離れたものになってはおかしかったはずだと考えてよいでしょう。(もちろん幾分か理想化のフィルターはあったのではないかという注意は必要です。)

それでは【図2】を参考に、個々の父系一族の肖似性を検証してみましょう。

### (例1) 源雅実の血筋の男子

まずは源雅実の血統の男子、つまり村上源氏の久我・土御門・堀川に分かれた5代6人の大臣の容貌を見てみます。顔貌を見てみましょう。

5雅定



18雅通



26通親



38通光



46定通



55具実



いかがでしょうか。目元の筆致に差はあれど、まず首がとても太く、そして顔

下部は丸々として面積も広く、唇はぼつてりと厚いという共通性を持っています。  
続いて彼らの体格を見てみましょう。

5雅定



18雅通



26通親



38通光



46定通



55具実



糊の効いた直線的なシルエットの<sup>こわしよろぞく</sup>強装束が体型を隠していますが、26土御門通親や、同母兄弟の<sup>みちてる</sup>38通光・46定通などは、首や顎が太いだけでなく、肩幅が広く、胸が大きく反り、相撲の力士のような立派な体格であることが見て取れます。彼らが代々どっしりとした恰幅のよい一族であったことが明らかです。他の人物とも比較してみましょう。



上の図は26土御門通親（左）と25九条良通（右）です。赤の他人である彼らの体格には明らかな差があり、通親は大柄に描かれているのが分かります。彼らが着る強装束は着彩せず簡略に描かれています。しかし、実は像主たちの体格差もが記録されていることが言えるのです。そしてそのことで、源雅実の血を引く久我・土御門・堀川家は、恰幅がよい家系だということが分かるのです。

## （例2）九条兼実の血筋の男子

次に九条兼実の血を引く男子の肖似性を確認します。まずは15兼実と、その血を引く25良通、31良輔、41良平の兄弟です。

15兼実



25良通



31良輔



41良平



ここにも筆致の差はありますが、先ほどの久我・土御門・堀川家の例と比較すると、鼻梁がはっきりとしていること、顔下部に贅肉がないこと、顔の骨格が細身であることが分かります。また体格についても細身の傾向にあるようです。

続いて九条兼実の子の良経（注<sup>9</sup>）の子・孫・曾孫の顔立ちを見てみましょう。

9 九条良経が描かれていたはずの第4紙と第5紙の間の紙は逸失しており、良経の図像は「公家列影図」に現存しない。

34道家



47基家



42教実



45良実



50実経



53忠家



56道良



やはりここでも鼻梁や頬肉・頬骨の辺りに、久我・土御門家などとははっきりと異なる一族の共通性が見て取れます。顔立ちだけでなく、落ち着いた眼差しの34道家や、その孫で16歳で大臣となった53忠家、17歳で大臣となった56道良などの従兄弟たちなどは、顔の輪郭は異なりますが、雰囲気にはどこか共通するおらかさが共通しているようです。

また、53忠家と56道良については、顎の小ささや首の細さ、ふっくらとした幼なげな面立ちなどに目がとまりますが、これは大臣初任の年齢がそれぞれまだ16、17歳であり、建長4年（1252）の段階でも24歳、19歳でしかなかったことが影響しているでしょう。

### (例3) 近衛基実の血筋の男子

次に近衛基実と、その血を継ぐ6人の男子を見てみます。

9基実



21基通



51家良



30道経



37家通



43兼経



52兼平



まずは15歳で右大臣となった基実本人の白皙ぶりが目にとまります。その子、孫、曾孫を見るといかがでしょうか。

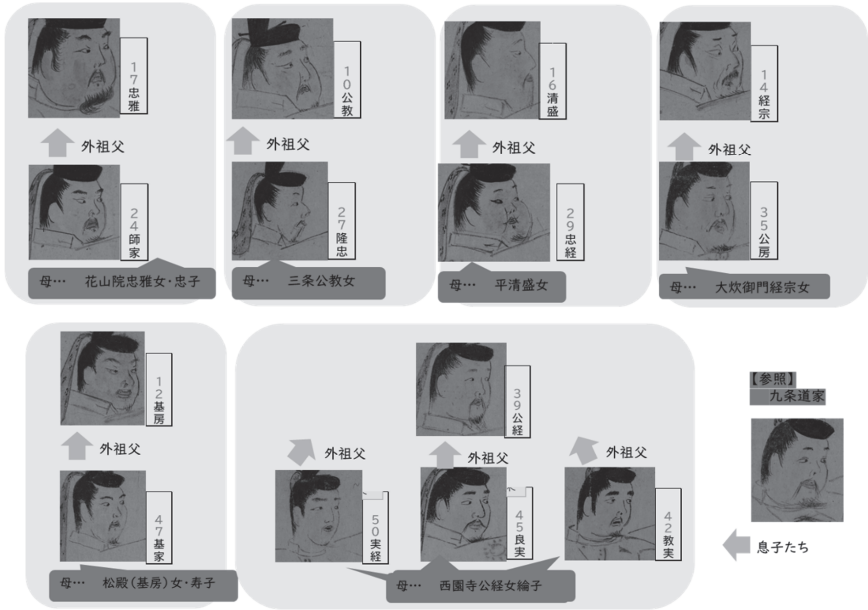
先ほどの久我・土御門・堀川家の大臣たちや九条家の大臣たちと比べると、鼻・頬・顔の骨格は九条家の大臣たちの方に似ています。体型も細身の傾向にあります。ただし唇は、37家通と52兼平の兄弟に顕著ですが、九条家のふっくらとした唇に比べると小さく、また上唇よりも下唇の方が大きく見えます。決して兄弟を似せようという意図で描かれてはいないように見えますが、像主たちが持っていた家族的類似性が、唇の形に窺われます。

また、印象論にはなりますが、柔和な雰囲気を持っていた九条家に比べて、近衛家は理知的な印象が勝っているのでしょうか。

さて、父系の一族についての肖似性を、例1～例3の三つの血筋から検証しました。それぞれが異なる個性や表情を持ちながらも、体型や顔の形・パーツ・雰囲気などには血筋による共通性を見出すことができます。

### (2) 母系の一族の肖似性の検証

次は、母系の血縁について検証してみましょう。残念ながら「公家列影図」には女性の肖像は含まれていません。そのため、母方の祖父と孫という組み合わせを見つけてみましょう。



いかがでしょうか。いくぶんか似ているように見える祖父と孫もいれば、まったく似ていない祖父と孫もあります。問題は、母方の血筋の肖似性を確認するために十分なサンプルがないことです。例えば平清盛の外祖父や、西園寺公経の外祖父の顔は分かりません。上の図で分かるように、「公家列影図」の中には母方の血筋が三世代と続く例はないのです。

さて、母系で血筋を見た時に気がつくことは、39公経の娘の繪子が34九条道家との間に儲けた42教実・45良実・50実経の三人がこのように打ち揃って大臣の位に上ったことは非常に特異な例であったということです。彼らだけではなく、後堀河天皇に入内した藻壁門院樽子や、源実朝の死後にわずか2歳で鎌倉第4代将軍に迎えられた九条頼経も、繪子が生んだ公経の孫たちです。また、西園寺公経の孫の大宮院姞子は後深草天皇と亀山天皇の母となりました。西園寺家と九条家、そして持明院統・大覚寺統の天皇の肖似性についても、後に制作された肖像絵巻「天皇撰関御影」(徳川美術館蔵、鎌倉時代末)、「天子撰関御影」(皇居三の丸尚蔵館蔵、南北朝時代)の二作品と併せて、より深く検証されていくべきでしょう。

## 検証2 紙形一肖像の型(パターン)の存在

続いて「紙形」、肖像の型(パターン)の存在の検証へ移ります。

「公家列影図」制作の背景には、「紙形」の継承があると考えられています。紙形とは、絵師が肖像画を制作する際に図像の確認のために用いる下絵のことです。時代が下がりますが、現存例に土佐光信筆「三条西実隆像紙形」(東京大学史料編纂所蔵)や、伝土佐光信筆「蛭川親元像紙形」(国立公文書館蔵)などがあります。黒田氏による前掲の日本美術全集の解説では、「藤原隆信・信実が始まる絵師の家に集積された下絵・模本類をもとに制作された」と示されていましたが、これは実際に「公家列影図」と同じ紙形をもとに制作されたであろう別の似絵作品の存在が指摘されているためです。

それでは、これまでに指摘されている「中殿御会図」との共通性を確認した上で、今回は「時代不同歌合絵」との共通性を新たにご紹介したいと思います。

### ① 「中殿御会図」

一つ目は「中殿御会図」です。これまでに、「公家列影図」が「中殿御会図」を「参考的原型」とした可能性が提示されています(注<sup>10</sup>)。「中殿御会図」とは、建保6年(1218)8月13日に行われた順徳天皇の中殿御会の様子を描いた絵巻で、詩歌や管弦に巧みな31人の者たちが参列しました。この御会に実際に参列していた藤原信実(生没年不詳)が原本の絵筆を執ったものと伝わりますが、原本は散逸しています。ただし模本は多く、近世の作例のほか、現存最古の模本とみられる九条家伝来本(北村美術館蔵)や、それに次ぐとされる出光美術館蔵の室町時代(15世紀)の作例が知られています。



「中殿御会図」(部分)(出光美術館蔵、室町時代写)

さて、ここに描かれた参列者のうち7人が「公家列影図」と共通しています。それでは比較してみましょう。

10 奈良帝室博物館編『日本肖像画図録』(便利堂、昭和13年)は、「中殿御会図」と「天子摂関御影」や「公家列影図」を比較し、「中殿御会図」の家嗣に髭がなく、後者2作品よりも若いこと、公経が大柄で良平が小柄であることを挙げて「之に依って、御会図が本図巻の、一種の参考的原型となった事を察し得るのである」と指摘している。

### (例1) 九条道家 (1193-1252)



「中殿御会図」より  
(出光美術館、室町時代写)



「公家列影図」より  
(京都国立博物館、鎌倉時代中期)

「中殿御会図」の道家(左)と「公家列影図」の道家(右)です。顔の向きが異なりますが、髪の生え際の線や、温和な眼差し、鼻の形などに共通性があります。(九条家伝来本では近似性をより見出すことができます。)

### (例2) 久我通光 (1187-1248)



「中殿御会図」より  
(出光美術館、室町時代写)



「公家列影図」より  
(京都国立博物館、鎌倉時代中期)

「中殿御会図」の通光(左)と「公家列影図」の通光(右)です。こちらは目の描き方や鼻筋が全く異なります。しかし、顔の輪郭、髭と唇、眉毛、目線などにやや同じ紙形の名残が見受けられます。

### (例3) 西園寺公経 (1171-1244)



「中殿御会図」より  
出光美術館、室町時代写)



「公家列影図」より  
(京都国立博物館、鎌倉時代中期)

「中殿御会図」の公経（左）と「公家列影図」の公経（右）です。こちらも、一重まぶた、眉毛、目線の方向、鼻の配置などに共通性があります。（九条家伝来本では近似性をより見出すことができます。）

#### （例4）九条良平（1184-1240）



「中殿御会図」より  
（出光美術館、室町時代写）



「公家列影図」より  
（京都国立博物館、鎌倉時代中期）

「中殿御会図」の良平（左）と「公家列影図」の良平（右）です。表情の印象は異なりますが、骨ばった輪郭や、鼻の穴と小鼻の描き方、目の上に一筋の線を引いてまぶたを表現している点などが共通しています。

#### （例5）西園寺実氏（1194-1269）



「中殿御会図」より  
（出光美術館、室町時代写）



「公家列影図」より  
（京都国立博物館、鎌倉時代中期）

「中殿御会図」の実氏（左）と「公家列影図」の実氏（右）です。独特の縦長の頭の形に、一重まぶたの形、目線の方向、鼻筋、髭の形などが非常によく似ています。

## (例6) 大炊御門家嗣 (1197-1271)



「中殿御会図」より  
(出光美術館、室町時代写)



「公家列影図」より  
(京都国立博物館、鎌倉時代中期)

「中殿御会図」の家嗣(左)と「公家列影図」の家嗣(右)です。どちらも一重の切れ長の目尻と、少し黒目がちな瞳を持っています。

## (例7) 衣笠家良 (1192-1264)



「中殿御会図」より  
(出光美術館、室町時代写)



「公家列影図」より  
(京都国立博物館、鎌倉時代中期)

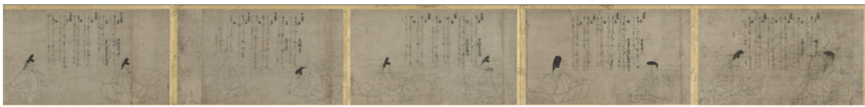
「中殿御会図」の家良(左)と「公家列影図」の家良(右)です。二つの作品の彼は、同一人物でありながらあまりに似ていないように見えます。例えば顔の大きさと鼻の大きさ・形のバランスや口元の様子には共通性が見出だせるようなものですが、生え際の様子や眉の太さ・角度、頬骨や顎の様子、そして目つきや鼻筋の印象などには大きな隔りがあるようです。(九条家伝来本において

も隔たりが見られます。)

さきほどの久我通光もそうでしたが、やはり「中殿御会図」の模本が作られていく過程で、顔貌が型(パターン)から離れていくこともあったのではないのでしょうか。すると例えば、「公家列影図」との顔貌の差の開き方から「中殿御会図」模本の伝本系統を見出すことも可能かもしれません。

## ②時代不同歌合絵巻

さて、ここでもう一つ、同じ紙形が用いられている作品をご覧いただきたいと思います。「時代不同歌合絵巻」(東京国立博物館蔵)(注<sup>11</sup>)です。



「時代不同歌合絵巻」(部分)(東京国立博物館蔵、1帖、鎌倉時代・14世紀)

「時代不同歌合絵巻(時代不同歌合絵)」は、後鳥羽院(1180-1239)の撰した古今の歌人100人の架空の歌合である『時代不同歌合』に歌人たちの肖像を添えた絵巻であり、左には三代集の歌人たち、右にはそれ以降の歌人たちの歌と姿を番えています。(歌の左右は反対に見ますから、実際の絵巻の画面上には古い時代の歌人たちが右、新しい時代の歌人たちが左に描かれています。)[『時代不同歌合』は、後鳥羽院の生前には既に絵を伴っていたものと考えられており、東京国立博物館には、伝為家筆の鎌倉時代(14世紀)かと思われる上巻(1~75番)が伝わり、またその断簡(注<sup>12</sup>)や、別の断簡なども確認されているものです。ここには「公家列影図」の大臣のうち、勅撰歌人でもある5人の姿が描かれていました。そのうち3人の姿が現存していますので、比較してみましょう(注<sup>13</sup>)。]

11 「時代不同歌合絵」の画像は以下 e 国宝 (<https://emuseum.nich.go.jp/>) より引用。

12 断簡「時代不同歌合絵 大中臣能宣・祝部成仲」(東京国立博物館蔵)は、もと「時代不同歌合絵巻」(同蔵)と一具。東京国立博物館ほか編『特別展やまと絵—受け継がれる王朝の美』(NHKほか、令和5年)作品解題(土屋貴裕氏執筆担当)を参照。

13 残る二人のうち、23 実定は「時代不同歌合絵巻」において、九条良経は「公家列影図」「時代不同歌合絵巻」において、図像が逸失しており現存しない。

### (例1) 藤原忠通 (1097-1164)



時代不同歌合絵



公家列影図

「時代不同歌合絵」の忠通（左）と「公家列影図」の忠通（右）です。左右反転しており、また被り物も異なりますが、顔の輪郭や目・鼻・口のバランスなどに共通性があります。

### (例2) 源雅定 (1094-1162)



時代不同歌合絵



公家列影図

「時代不同歌合絵」の雅定（左）と「公家列影図」の雅定（右）です。彼の場合は、首元や襟足、顔の部品一つ一つの造作まで、同じ紙形の存在をはっきりと感じさせます。ただし両者では年齢の印象が異なります。彼は両絵巻が成立するはるか昔の人物のはずですが、これは「公家列影図」が初めて彼が内大臣についた56歳という年齢を表現しようとしたためでしょう。

### (例3) 九条兼実 (1149-1207)



時代不同歌合絵



公家列影図

「時代不同歌合絵」の兼実(左)と「公家列影図」の兼実(右)です。彼は藤原清輔・藤原俊成ら大歌人から和歌を学び、多くの和歌行事を主催しました。「時代不同歌合絵」では、画面やや上に描かれた醍醐天皇を仰ぐように坐しています。そのため、こちらには横顔を向けていますが、少し角度を変えれば「公家列影図」と同一人物となるはずの輪郭を持っています。髭や鼻筋などにもご注目ください。

以上、両絵巻の三人の大臣の顔貌を比較し、その一致の度合いの強さを確認しました。「公家列影図」に並ぶ大臣たちのうち歌人として名をなした者はごく一部です。しかしそうした歌の才を持っていた大臣については、「時代不同歌合」という時空を越えた虚構の歌合が絵画化される中で、すでにこのように過去の歌人と対峙する現在の歌人として、キャラクターデザインがなされていました。そして、紙形の継承を通して、「歴代の大臣の列影」という異なるテーマを持つ似絵の中にそのキャラクターデザインがまた利用されていたのだといえるでしょう。

#### 検証3 才能・個性と顔貌表現

さて、最後に「公家列影図」における個々の像主が持つ才能・個性と顔貌表現の関係について、何人かの人物から見ていきたいと思います。

前掲の『特別展やまと絵』の解説でも言及されていたように、「似絵」の技法とは、その場で直接対象の特徴を画面に表わす技法であり、さらに時には見たことがない人物を描く際の基本的な型ともなっていたものでした。「公家列影図」を手掛けた絵師たちにおいても、継承された紙形がない過去の人物たちの顔貌表現を

デザインする際には、やはり経験や想像力を用いるほかはなかったはずで  
兼好法師は顔の想像ということについて、次のように記しています。

名を聞くより、やがて面影は推し量らるる心地するを、見る時はまた兼ねて  
思ひつるままの顔したる人こそなけれ。

(徒然草・第71段より)

「だれそれと聞くと、こうした顔だろうかとぼっと思い浮かぶ気がするが、実  
際に会えば想像通りの顔をしていることはまずない」。たしかに現代の私たちも、  
会ったことがない人物の顔を先入観によって想像してしまいます。

また土屋貴裕氏も、「公家列影図」を楽しむためのアプローチの中で、藤原頼長、  
平清盛、源実朝を例に挙げて、過去の肖像を映す際には「後の時代の人々が思い  
描いた人物像に基づいて、表現がほんの少しだけ変化する」ことがあるというこ  
とを紹介されています(注<sup>14</sup>)。

才能・個性から思い描かれた人物像というものは、顔貌表現にどのように影響  
しているのでしょうか。これから五人の大臣たちの例を見ていきましょう。

### (例1) 源有仁 (1103-1147)



「公家列影図」57人中2人目に描かれた源有仁です。彼については『今鏡』が「光  
源氏なども、かかる人をこそ申さまほしくおぼえ給へしか。」(第八「御子たち」)と、  
後三条天皇の孫である彼の少年時代を光源氏に準えて褒め称えています。また、  
「鳥羽の院、この花園の院、大方も御見目とりどりに、姿も得も言はずおはしま

14 土屋貴裕「世界に一つだけの顔」(『博物館 Dictionary』No.204、京都国立博物館、平成30年)

す上に、細かに沙汰せさせて、…」と、装束の美を追究したことをも伝えています。

藤原頼長の日記『台記』でも、頼長は死が近づく彼を惜しみ、「大臣為人、容貌壯麗、而進退有度」と、有仁が洗練された姿とふるまいの人物であったことを振り返っています。

顔貌を見ると、眦の鋭さや結ばれた口元の様子に、若さと落ち着きを併せ持ったバランスの良さがあります。近世の伊勢貞丈『貞丈雑記』は「有仁公、花奢風流を好み給ひしなれば、眉をぬき鬚をはさみ鉄漿を以て齒を黒め白粉をぬり紅脂を付る類、女のまねをする事も有仁公の始められし成べし。」(卷之二人物之部)と、眉や髭を手入れしたり、お歯黒やお白粉を塗ったり、唇に紅を差すなどといった女性のお化粧を、男性貴族が真似るようになったのは、有仁が始めたことであるという説を載せています。『貞丈雑記』は近世の資料であるため、確たる資料とはなりません。少なくとも光源氏になぞらえられる美貌の大臣という逸話が、後世にそのような説を生んだのだといえるでしょう。またこれらのことによって、この有仁の顔が鎌倉時代における貴族男性の「美しさ」を体現していることがいえます。

## (例2) 中御門宗輔 (1077-1162)



「公家列影図」の57人中、7番目に描かれたこの人物は、80歳の中御門宗輔です。描かれた57人のうちで最も小柄な一人であり、強装束にしては柔らかそうな束帯にすっぽりと身体を埋めています。保元元年(1156)に「悪左府」頼長の死を契機とした政治権力の交代の中、80歳という高齢で右大臣に上った人物である彼は、口を真一文字に結び、皺が刻まれた顔から鋭い眼差しを送っています。彼には、日頃蜂を飼いならし、ある日の鳥羽殿での蜂騒動を沈着冷静に収めたことで「蜂飼いの大臣」と呼ばれた(『今鏡』「藤波の下」、『十訓抄』一ノ六ほか)と

いう有名な逸話がありますが、そうした経歴と逸話は、この嬰鑠とした顔貌にとでも似つかわしいのではないのでしょうか。

### (例3) 近衛基実 (1143-1166)



参照:50実経



「公家列影図」の中でおそらく最も際立った美貌を持つ大臣がこの近衛基実です。まるで伊勢・源氏の物語絵の中から抜け出してきたような貴公子ぶりです。

ただし、その外見のイメージとは裏腹に、勅撰和歌集には一首も入集せず、詩歌管絃の記録もほぼないのが彼であり、文事ではまるで無名の大臣といえます。それではなぜこのように美しく描かれるのでしょうか。父忠通の鍾愛の子としてわずか16歳で関白になり、たった24歳で早世した彼について、『今鏡』の語り手は「このおとど御見目も肥え、清らにおはしましき。また、手なども昔の跡つき申させ給へりけり。いとめでたく聞きたてまつりしほどに、夢のやうにてかくれさせ給ひにし、いと悲しくこそ。」(「藤波の中」)と哀惜の念を持って語っています。「公家列影図」では他にも、父道家に愛された50一条実経が他の兄弟たちよりも若く女性的に描かれているという例があります(上図参照)。

それにしてもこの基実の美しさは「公家列影図」中でも特異といえます。子の基通は後白河院と男色関係にあったことが指摘されています。また先述のように男性の眉・口の化粧がこの頃に始まったと言説があるなど、彼の美貌はジェンダー史・文化史とも併せて取り上げるべきテーマかもしれません。

そして、似絵における写実性の線引きを考える上でも重要な人物です。彼には57人の中で唯一、鼻の穴や小鼻が描かれていないのですが、そのことが現代の少女漫画のような印象を与えています。鼻の描き方が写実性に影響することがよく分かる例です。

#### (例4) 中御門宗能 (1085-1170)



78歳で大臣となった中御門宗能です。目尻の皺や髪の色、肉付きなど、78歳らしい容貌であり、また、穏やかで落ち着いた表情は、理想的な貴族の老年期の姿とも感じられます。実は57人の中で、このようににっこりとまぶたを閉じているのは彼だけです。

彼について特筆すべきは、『御遊抄』で御遊の記録を見た時に、57人の中では異例といってよいほどの数の宴席で「付歌」を担当しているということ（注<sup>15</sup>）、朗詠に長けていたということです（注<sup>16</sup>）。歌の名人であり、宴席の盛り上げ役であったというエピソードは、この穏やかなほほえみに似つかわしいようです。

15 『御遊抄』で、宗能が付歌を担当したことが分かる御遊は、保安4・11・20、長治2・1・5、永久4・2・19、永久5・3・7、天承1・1・2、天承2・1・2、保延2・1・5、久安6・1・20、天永4・1・1、保延2・7・23、大治4・1・7、長治2・10・27、天承1・1・1、永久4・1・23の御遊。また『古今著聞集』巻十六・五五八話では、宗能が朗詠九十句を撰したことが取り上げられている。

16 『今鏡』「藤波の下」に宗能が「催馬楽の上手」であることが語られている。

## (例5) 源実朝 (1192-1219)



最後に、源実朝を取り上げて終わりたいと思います。頼朝と北条政子の子であり、和歌や公家文化を愛しながら、右大臣拝賀のために参詣した鶴岡八幡宮で殺害され、28歳で没した彼の経歴はあまりに有名ですが、大臣として極めて特異な出自を持ち、特異な最期を遂げた彼の表情は、やはり極めて特異なものです。他の大臣たちが忠通のいる画面右に向かって視線を上げているのに対して、彼だけは斜め前に視線を落としながら、じっと何か考えこんでいるようです。

また、顔の肌の色合いも、絵巻全体を遠目に見ても彼のことははっきりと識別できるほどに濃く彩色されています。これは白粉を塗っていないということなのか、日に焼けているということなのか、注目したい特徴です。(経年による色の変化の可能性も考慮しなければいけません。)

以上、才能・個性と造型の特徴について5人の例を紹介しました。このように、絵師が面前にすることが叶わなかった、しかし造型を新しく作らなければならない人物については、その表情や佇まいなどをデザインする際に、やはりその人物に対する逸話が参考になったことでしょう。そしてここまで見てきたように『今鏡』のような歴史物語や説話類などがその参考になったと思われます(注<sup>17</sup>)。

## おわりに

最後に、今回の検証から整理できたことをまとめます。

まず、主に12世紀中頃から13世紀中頃の大臣たちを初任年順に一同に会させたこの「公家列影図」制作における特徴として、顔貌や体型に父系の一族の肖似性、

17 『今鏡』には他にも、「公家列影図」で目が吊り上がり口を開いた様子で描かれる8伊通が、毒舌であったことを伝える逸話などがある(「藤波の下」)。

家族的類似性が確認できるということがいえます。母系の一族の肖似性についてはサンプルが不十分なものの、西園寺家と九条家、大覚寺統・持明院統の天皇の肖似性について今後検討する必要があることが分かりました。

そして、「中殿御会図」や「時代不同歌合絵巻」中の同一人物との顔貌の比較により、「公家列影図」作者は過去の絵師から継承された「紙形」がある場合はそれを尊重していると考えられます。「紙形」がない場合には、歴史物語や説話に記述された才能や個性などから人物像を想像し、顔貌を造型したようです。また、像主が存命中の場合には、新たに本人を面前にして、顔貌の個性を豊かに描き分けていたのではないかということも、【図2】の顔系図によって推測されます。

また、顔系図によって、緩やかに画風に変化が生じていることが分かりました。これは隆信や信実、複数の絵師によって「紙形」が起こされたためであろうと考えられます。すると、後嵯峨天皇時代の存生の大臣たちの顔つきが、過去の大臣たちのそれよりも穏やかなものへと変化していつていることに留意したいと思います。それは当代の絵師たちにとっての「公家列影図」制作の意味を今後さらに探る手がかりになるはずだからです。

拙い発表ですが以上です。お聴きいただきました皆さん、ありがとうございました。